

to avoid monks giving into indulgence of clothes, food, shelter and medicaments. Buddha's admonition inspired the following remarks. Vinaya I, 58.

(8). See above note 7

(9). Satisfaction of what one receives is one of virtues praised by Buddha.

Annañ ca laddhā vasanañ ca kāle

mattañ so jaññā idha tosanatthañ (Sutta Nipāta Verse 971).

"Having received food and clothes at the right time, he should know here the limits of satisfaction."

Criticising the degradation of Brahmins, Buddha remarks: "They receiving wealth desired to hoard it. Overcome by desire, their craving increased the more." (Sutta Nipāta, Verse 306)

Unsatisfaction of wealth always leads to misery. Raṭṭhapāla sutta, No. 82, Majjhima Nikāya II, 72—4

(10). Parābhava sutta, v.91—115; Vasala sutta, v.116—142; Mahā Mangala sutta, v.258—269, Sutta Nipāta; Sīgālovāda sutta, Sutta No. 31, p. 180f.

(11). Dīgha Nikāya III, 188.

(12). Arogyā paramā labhā, "Health is the highest gain." Dhammapada, v. 204.

(13). Dīgha Nikāya III, 192 verses.

(14). see above note 5.

(15). Dīgha Nikāya I, 142.

(16). Dīgha Nikāya III, 61.

(17). This phrase illustrates the reality that a practitioner realizes.

Samyutta Nikāya V, 423.

(18). "Patirūpa desa vaso", Sutta Nipāta v. 260.

(19). Majjhima Nikāya I, 37, 42, 43; Aṅguttara Nikāya V, 263f.

(20). Dīgha Nikāya I, 63.

(21). Ambalaṭṭhikā-Rāhulovāda Sutta, No. 61, Majjhima Nikāya I, 414.

(22). Aṅguttara Nikāya I, 189—193; 193—197; 201—205.

## 侍者 ĀNANDA

崔 庚満 (浄印)

### 目次

侍者 Ānanda.	1
I Ānanda の家系	1
II Ānanda の出家	6
III 侍者に選ばれる。	8
1 仏陀の御心	8
2. Ānanda の願い	12
3. 仏陀と最後の瞬間	14
4. Ānanda の人間味	16
IV 尼僧教団	18
注	21
参考文献	23

### 侍者 Ānanda

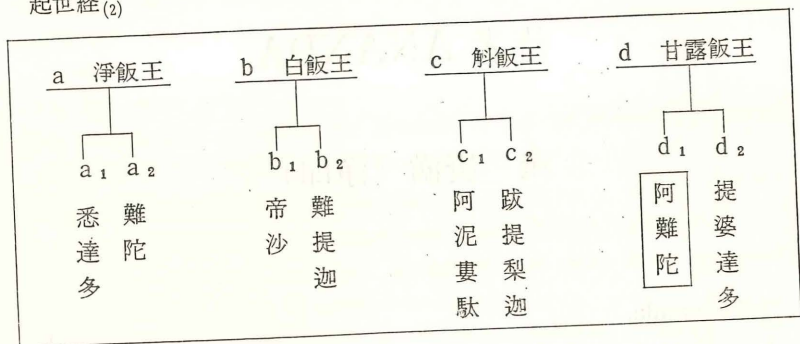
#### I Ānanda の家系

Ānanda という名は、Pāli・Sanskṛit 語とも同形であり、音写は阿難陀、或は阿難とされている。意識は慶喜という。

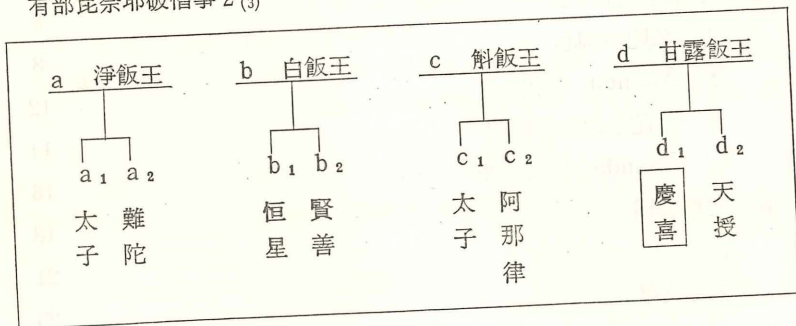
Ānanda の家系について、次の資料から見ると、

このように資料によって異なっている、『起世経』『有部破僧事』『十二遊経』『衆許摩訶帝経』には Ānanda の父が甘露王であり、『仏本行集経』

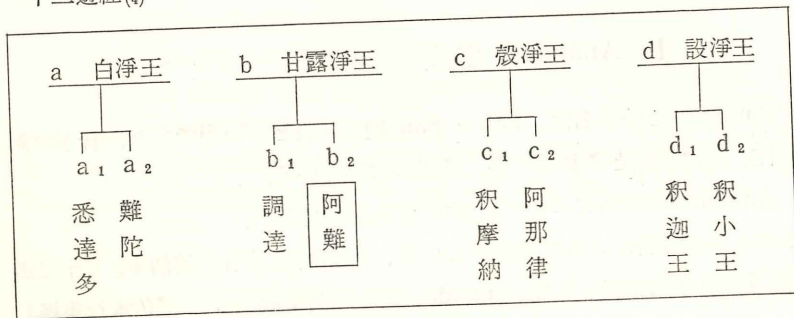
起世經(2)



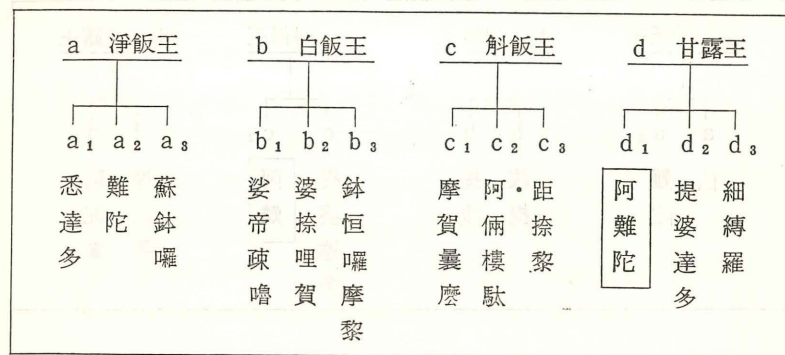
有部毘奈耶破僧事 2(3)



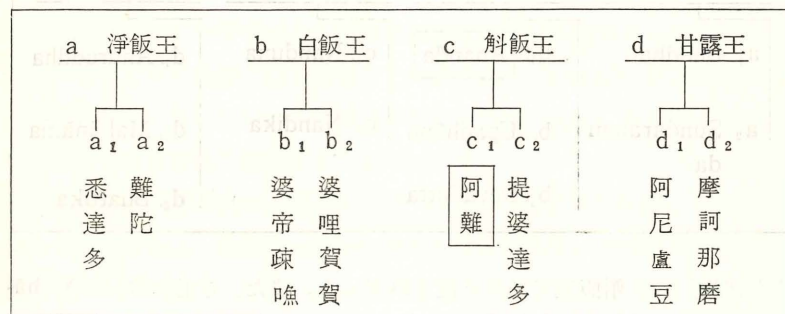
十二遊經(4)



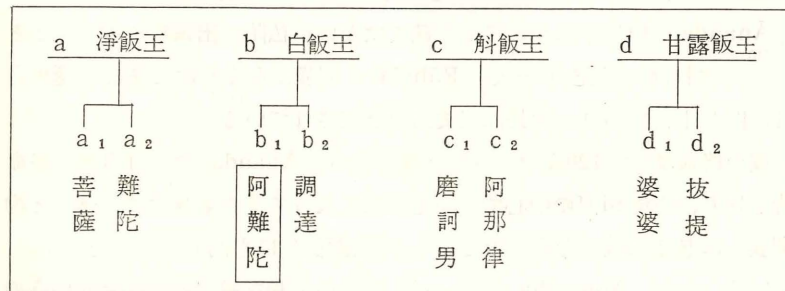
衆許磨訶帝經 2(5)

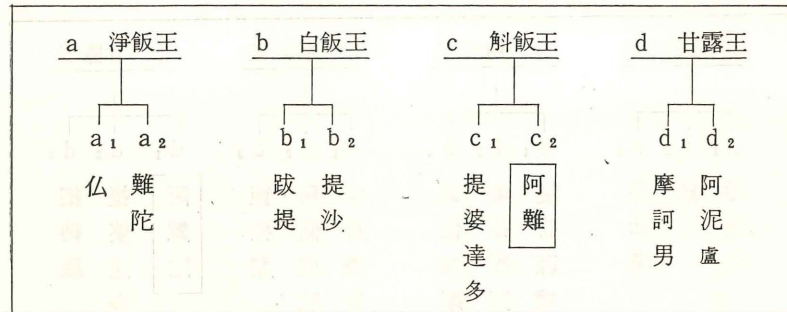
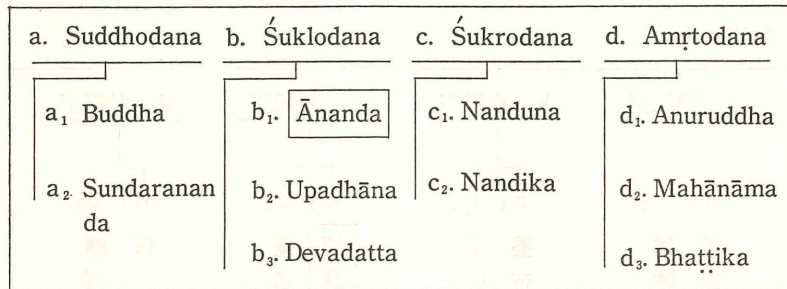


仏本行集經 11(6)



五分律(7)



Maha vastu III<sup>(9)</sup>

『大智論』には斛飯王であると記されている。また、『王分律』 Mahā-  
vastu III では父が白飯王になっている。しかし、仏敵と言われる Deva-  
datta と Ānanda とは兄弟であることが諸資料が一致している。従って  
Ānanda と Devadatta が仏陀の従弟であるのが明らかである。

Ānanda の出生年については明確ではないが仏陀の出家年に生れたと  
<sup>(10)</sup>いう。すれば、仏陀の一子、Rāhula と同歳になるわけである。<sup>(11)</sup>誕生月  
日は四月十日であり、身長は五丈三寸と記されている。<sup>(12)</sup>

彼の終命は世寿120歳であったと言われる。<sup>(13)</sup>Ānanda は自分自身の終命  
時を知り、Rohini河の中心で、心定三昧に入ってその半身ずつ釈迦族と拘  
利族とに与えて戦いを避けたという。『法顯伝』にも同じ内容が記され  
ている。ただ、Magadha 国と vajji 国との不和を避けるためだというの

が異っている所である。Ānanda の終命が120歳であったと、示される  
のは理解しにくい、長寿したのは確かであろう。Theragātha の彼の偈  
からも見る事ができる。

「むかしの人々は、すでに去り、新しい人々は、私となじまない。今  
日、私はただ独り思いに耽。——雨のために巣ごもりする鳥のように。<sup>(14)</sup>

友が世を去り、師も入滅されてしまった者にとっては、もはや、身体  
に関して心がけることほど、親しい友は存在しない。<sup>(15)</sup>

この二つの gāthā の中で、むかしの人はずでにいないとか、親しい友は  
いないというところから、彼が長寿したことがよくわかる。

## II Ānanda の出家

Ānanda が仏陀の常随侍者であったことは一般によく知られている。  
仏陀が四五年間、一所不在として歩き回る際、彼は仏陀末年二五年の間を  
仏陀の影のように仏陀の許で侍者として勤めた。Ānanda が何歳に出家  
して侍者になったかについては明確に伝えられていない。しかし、資料を  
もとにして次の方法で推定することができる。

(一) Ānanda の出生年は、仏陀の一子 Rāhula と同年であるというので、  
Rāhula の出生は、仏陀の出家年に生れたと言われる、その時仏陀は二九  
歳であった。<sup>(16)</sup>

(二) 仏陀が成道後、十五年頃、雨安居を Kapilavatthu、仏陀の故郷です  
ごされている時、Ānanda は、跋提王・阿那律・婆咎・金毘羅・優髮離  
・提婆達多・等とともに出家したと記されている。<sup>(17)</sup>その時の仏陀の年齢を  
計算すると、[29+6+15] 五十歳になる。これをもとにして仏陀の年齢  
を逆算すれば、(50-29+1) 二十という数字が出る。これが Ānanda  
の年齢であり、出家する時の年齢でもある。

(三) Ānanda は仏陀八〇歳入滅まで末年二五年間侍者として勤めたとい  
うから、<sup>(18)</sup>それをまた逆算すると、(80-25) 仏陀五五歳より侍者の勤めが  
はじまったというわけである。その時 Ānanda の年は二五歳であったの  
が明かである。

さて、この三つの記録に従うと、Ānanda、20歳頃、Kapilavatthu で出家、二五歳頃、侍者になって仏陀八〇歳入滅まで勤めたことになる。図表として示すと次の通りである。

仏 年 齡	二 九	三 五	五 〇	五 五	八 〇
仏 陀 出 家	成 道		kapilavatthu で 安 居	常 隨 侍 者 望	入 滅
Ānanda	出 生		出 家 ( 20 )	侍 者 じ め	五 五 歳
Rāhula	出 生				

### Ⅲ 侍者に選ばれる

#### 1 仏陀の御心

祇園精舎で、仏陀は比丘等に向って、

「比丘らよ、現在われは考齡であり、体も衰弱している。常隨侍者一人を指定してくれ。」と。

自から告げられる。仏陀成道後、五五歳頃まで定められた侍者がいなかったのである。しかし、仏陀の身のまわりを世話している侍者はあったらしい。けれども、彼らは仏陀の御心を充分満足させなかったようである。

「我がこの路から行けと、言っても彼らは他の路から行き、私の鉢や衣を地上に投げるような姿もあった。」と。

告げられる。これは仏陀のよい侍者が必要であることをよく示されているとも言える。

仏陀の希望に従って当時上首弟子、憍陳如・阿説示・拔提・舎利弗・目犍連・金毘羅・離婆多・大迦葉・大拘絺羅・大周那・大迦旃延らが集合して相談したのである。その席で、憍陳如が先きに立って、自から侍者になりたいと申しあげるのである。彼は最初仏陀が出家なされ苦行する時、淨飯王より仏陀の身辺保護を頼まれた人である。いわば、五比丘の中の一人である。

しかし、憍陳如の侍者希望は、仏陀より年長者であると、仏陀から拒否

される。

「世尊曰、耶舎、汝自年老体軋衰弊寿過垂訖。汝亦自応須瞻視者、耶舎。」<sup>(22)</sup>

自から侍者の希望者が二〇余名であったが仏陀は考齡やその他の理由で退けられるのである。その時、上首弟子の一人である Moggallāna が仏陀の御心の中を読んだのか、Ānanda の処に行つて、

「Ānanda よ、世尊の御胸にはあなたを侍者として勤めさせたいと思つておられるのである。」と話しかける。

しかし、Ānanda は最初、侍者の任務が自分のものには分に過ぎる仕事であると念慮して受け入れないのであるが、弟子たちの要請のため結局受け入れるのである。

仏陀が侍者選択においてなぜ、Ānanda のみ御心にあつたのか。他人は年老であり、Ānanda は若者であるからとすれば、当時教団内には Ānanda 以外、若者たちも大勢にいったはずであろう。ただ、Ānanda が若者であることにより、侍者としての専門性を持つていったと思われる。仏陀在世当時、印度社会にはすでに文字が存在していったが、一般生活において筆録するほど広く普及されてはいなかったと考えるべきである。仏陀の教えも、「梗概要領」として筆録より口伝によって伝えられるのが、最初の在り方であった。当時伝統的な学問は筆録より記憶の方法によって口伝されるのが、もっとすぐれた伝承方法であるから筆録しなかったとも言う。いずれにしてもすぐれた暗記が重要である時代である。師の教えを聞いて暗記して伝承するには記憶術が必要とするのである。

侍者という役割はいつも仏陀のおそばでいながら世話する役割なので当然仏陀の説法を聞く機会も多いのである。ちなみに聞いた説法をできる限り全部記憶しておくことも大切な仕事であろう。

仏陀はそのすぐれた記憶術を Ānanda に見つけたので、侍者として適切な人物であると、思われたかも知れない。Ekapuggalavagga 14に、「多聞第一・具憶念第一」と記されている。Theragāthā に、「一を聞いて百を知り、意義を知り、言葉や語句に精通する者、よく会得し、そして

意義を探索する」という。<sup>(26)</sup>

## 2. Ānanda の願い。

Ānanda 自分は仏陀の侍者に選ばれることについて最初拒否したが、上首弟子からの要請があったため受け入れる。しかし、受諾する代りに、条件、いわば、願いをつけるのである。

「尊者、← Moggallāna ←よ、←世尊が私の三つの願いを許して下さいならば、如来の侍者になります。」と。その三つとは、

- (一) 願不著仏新故衣。
- (二) 願不食別請仏食。
- (三) 願不非時見仏也。<sup>(27)</sup>

どうして、Ānandaが三願を取り挙げたのか、次の如く考えられる。

(一)に対しては、諸比丘が Ānanda に対して、「Ānanda は仏陀の衣を着るために仏陀に侍奉する」と。嫉妬される恐れを避けるためであろう。

次ぎ、(二)に対しては、

「Ānanda は仏陀の托鉢の中の供養を食べるために侍奉する」と。言

われる恐れを避けるためであろう。三に対しては、

「比丘らをはじめ、教団内外の人と外道らが時節をわきまえず、仏陀を訪れる恐れがあることを」。避けるためであろう。しかし、パーリの Jā-

taka<sup>(28)</sup>には四つの拒否と四つの希望と合わせ、八つの願いが記されている。

まず、四つの拒否とは、

- (一) 仏陀自分が得られた衣を私に与えず、
- (二) 仏陀の鉢の食物を私に与えず、
- (三) 仏と同じ芳香ある住民に住むことを許されず、
- (四) 私を連れて招待に行かれないすること

次ぎ、四つの希望とは、

- (五) もし、私が受けた招待に世尊も行かれてくださる希望、
  - (六) もし、私が外国や遠い地方から連れてきた仲間を世尊が面会してく
- ださる希望

(七) もし、私が疑惑が起った時、即刻世尊に親近が許される希望

(八) もし、私の不在中、世尊が説法せられたものを私が帰えたら、私に

以上八つの願いである。

Ānanda は侍者として仏入滅まで25年間、仏陀の意志通り動き、教えをよく守り、少しも怠ることなく侍奉したのである。

「仏陀が経行されていられる時、私はその後からつき従って経行した。また仏陀が教えを説かれている時、私は智慧が生じた。」<sup>(29)</sup>としている。

## 3 仏陀と最後の瞬間

仏陀が kusinārā で Ānanda に告げられる。

「Ānanda よ、我のためにサーラ双樹 (yamakasāla) の間に、頭を北向きして床敷け。Ānandaよ、我は疲れた。我は横になりたい。」<sup>(30)</sup>と、これは仏陀が入滅に臨んで Ānanda に告げられた言葉である。Ānanda にとっては、師であり、従兄である仏陀のこの一言が彼に断腸の痛みを与えられたのは相違いない。Ānanda はあまり悲しくて泣くのである。

「嗚呼、私は有学で、またなすべきものがある。しかも私を慰んでくださる師は私を離れて、般涅槃に入りになる。」<sup>(31)</sup>と、絶叫するのである。

仏陀は Ānanda の悲しみを気づかれたか、慈愛の言葉で、

「Ānanda よ、泣くのを止めよ。かって我がこのように説いたのではないか。すべてのどんな愛しく好きなものとも〔生〕別し〔死〕別し、〔死後境界を〕異にすると。Ānandaよ、かの生じて、存在せる、造られたる壊れる性質あるものであって〔しかし〕それが壊れないというよう

な、そのような、道理があるはずはない。

長い間、Ānanda よ、汝は慈愛ある、安楽ある、二つとない、無量の身業に依りて、口業に依りて、意業に依りて、如来に近侍してくれた。

Ānanda よ、汝はよくしてくれた、精進を行なえよ。速かに無漏〔の身〕となるであろう。」<sup>(32)</sup>と Ānanda を慰勞する言葉を述べられる。さら

に、

「比丘らよ、長い間、Ānanda は我の侍者として忠実を尽した。彼

は温和し、優しく、よく我の大法を聞いて忘れなかった。人々においては徳を輝いた。また、Ānanda はよく時を知った。比丘、比丘尼をはじめ、在俗の人々が我を詣する時、時を計って人々に多くの功德をくれた。遠くから来た比丘が我の許に来る時に Ānanda は親切に迎えた。比丘尼に対しても、在俗の人々に対しても、Ānanda は親切に迎えてくれた。彼等は Ānanda の親切に喜んだのである。Ānanda は実に敬虔なる侍者である。Ānanda はやさしさと美しさとともに、徳を具した<sup>(33)</sup>のである、と、ほめるのである。

Ānanda は侍者として仏陀を満足させられたようである。しかし、侍者の任事が Ānanda にとっては重かったのか、仏入滅後 第一結集前夜まで有学であったと言われる。

#### 4 Ānanda の人間味

Ānanda は弟子たちの中でも人情味が深い人物であると知られている。仏陀の入滅際 厳しい修行者の姿を忘れて絶叫しながら哀悼の情を顕わされたことは勿論ことと言えるが、Sāriputta か、仏陀より先に亡くなった時も彼の哀惜な心をよく読められる。

「四方、さだかに見えず、教えもまた、私にとって明らかでない。友がこの世を去ったので、暗黒に覆われたように思われる。」Mahāvagga によれば、Mahākassapa がĀnanda に具足戒の教授を頼まれるが、

「Thera の名は私には相応しない。」と、辞退した<sup>(35)</sup>という。これは彼の敬虔な姿であろう。仏陀の養母 Mahāpajāpati が、出家入団を仏陀に申しあげたが、受け入れなかった。しかし、Ānanda の取り成しによって許可されたのである。これも彼の深い共感の心の発路であろう。彼を、温和な慈愛の心と敬虔な性格と人情心深いとを持つ人物であると、言ってもよいであろう。そのような人物であったので、かえって、arahant を得るのが遅れたのかも知れない。

## VI 尼僧教団

比丘尼教団の成立において注目すべきものが Ānanda である。すでに

できた比丘教団から、女性は仏教の器ではないと。認定されている当時、Ānanda の取り成すによって仏陀より許可を受けたのである。

最初の尼僧は Mahāpajāpati である。彼女は仏陀の養母であり、Nanda の生母である。Nanda も出家し、孫子である Rāhula も出家した上に、夫君浄飯王も亡くなられたので、人生無常を感じたのか、出家を求めたのである。Mahāpajāpati が仏陀の所にいって、

「世尊よ、女人も第四沙果をもとめて、これによって女人も正法律の中にあって、信に至って家を捨てて道に修むことができるでしょうか、」と、訪ねたのである。世尊、曰わく、「止めよ、止めよ、瞿曇弥よ、」<sup>(36)</sup>と、彼女の出家を許さなかったのである。

この様子を仏陀の下で見た Ānanda が仏陀に女人も出家できるように三度懇請したという。それでやっと、仏陀が許可して、尼僧教団が成立したのである。Mahāpajāpati をはじめ、釈迦族の女人達が出家することになった。しかし、仏陀は彼女らのために新たに八つの規則を設けられた。言わば、八尊師法<sup>(37)</sup>である。

- (一) 比丘尼は比丘に従って戒を受けなければならない。
- (二) 比丘尼は半月毎に比丘の教えを受けなければならない。
- (三) 比丘がいない処に安居してはならない。
- (四) 安居が終ってから两部衆に向って、見、聞、疑、の三事に対して請しなければならない。
- (五) 比丘尼は比丘の許可がなければ、経、律、論、に就いて質問することができない。
- (六) 比丘尼は比丘の犯戒を挙げてはいけませんが、比丘は比丘尼の犯戒を挙げられる。
- (七) 比丘尼が、もし、僧伽婆尸沙を犯したならば、两部衆の中で半月の間謹慎を行わなければならない。
- (八) 受戒百歳の比丘尼も新比丘を拝礼しなければならない。

以上、八尊師法を説けられると同時に、女人の出家ために正法時代一千年が、正法五百年に、滅したと告げられるのである。

Ānanda が仏陀在世時、侍者の任事は勿論、教団内外においても重要な役割をはたしたにもかかわらず、仏陀入滅後、第一結集が終ると、Mahākassapa 上首弟子によって過去侍者時代の行動を取り挙げられ、罪<sup>(38)</sup>して問責されるのである。

仏入滅後、年老いて出家した Subhadda (最後の弟子とは同名異人) の暴言によって、第一結集が行なれることになった時も、経の誦出は Ānanda によるものであった。それほど彼の役割は重要であったのである。

## 注。

- (1) 赤沼智善博士『印度固有名詞辞典』P.24.
- (2) 『大正蔵』一卷 p.364、中。
- (3) 『大正蔵』二四卷、p.105上。
- (4) 『大正蔵』四卷 p.146、下。
- (5) 『大正蔵』三卷、p.937下。
- (6) 『大正蔵』三卷、p.701下、
- (7) 『大正蔵』二二卷、p.101中。
- (8) 『大正蔵』二五卷、p.83、下。
- (9) Mahāvastu III、pp.176~177。
- (10) 『大正蔵』四卷、p.146、下。
- (11) 『大正蔵』三卷、p.937、下。
- (12) 『大正蔵』四卷、p.146。
- (13) Dhammpada Atthakatha II、p.29。
- (14) Theragathā、1036偈。中村元博士 和訳。
- (15) Theargathā、1035偈。
- (16) 『方広大莊嚴経』12。
- (17) 『南伝大蔵経』四卷、p.278~279。
- (18) Tharagathā、1036~1043偈。
- (19) 『南伝大蔵経』三三卷、p.346。
- (20) 『南伝大蔵経』三三卷、p.346、
- (21) 『大正蔵』一卷、p.471、下。
- (22) 『大正蔵』一卷、p.472。
- (23) 前田恵學博士『釈尊』p.163。
- (24) 前田恵學博士『釈尊』p.195。
- (25) Anguttaranikāya、vol. I、p.23。

- (26) Theragāthā 1028偈。
- (27) 『大正蔵』一卷、p.472。
- (28) 『南伝大蔵経』三三卷、p.346。
- (29) Theragāthā、1044偈。
- (30) Dighanikāya、Vol. II. p.137。
- (31) Dighanikāya、Vol. II. p.143。
- (32) Dighanikāya、Vol. II. p.144。
- (33) Dighanikāya、Vol. II. p.145。
- (34) Theragāthā、1034偈。
- (35) Mahāvagga Vol. I. p.92。
- (36) 『瞿曇弥経』
- (37) 『大正蔵』一卷、p.605。
- (38) Vinaya II. p.292。
- (30). (31). (32). (33)、前田恵學博士『釈尊』

## 参考文献

- 『南伝大蔵経』大蔵出版、1938。  
 『大正大蔵経』大蔵出版、1924。  
 『高麗大蔵経』東国訳経院。
- 前田恵學博士、『原始仏教聖典の成立史研究』山喜房仏書林、1964。  
 前田恵學博士、『仏教要説』山喜房仏書林、1968。  
 前田恵學博士、『釈尊』山喜房仏書林、1972。  
 赤沼智善博士、『印度仏教固有名詞辞典』法蔵館、1967。  
 赤沼智善博士、『原始仏教の研究』法蔵館、1981、復刻第一刷。  
 塚本啓祥博士、『初期仏教教団史の研究』山喜房仏書林、1966。  
 水野弘元博士、『パーリ語辞典』春秋社、1975。  
 水野弘元博士、『南伝大蔵経総索引』ピタカ、1977。  
 望月信亨博士、『望月仏教大辞典』世界聖典刊行協会、1974改定第一刷。  
 玉城康一郎博士、『仏教比較思想論的研究』東京大学出版会、1979。  
 中村元博士訳、『仏弟子の告白』岩波書店、1982。  
 平川彰博士 『原始仏教研究』春秋社、1964。